

夏型感染症

いわゆる夏型の感染症として、ヘルパンギーナ、手足口病、エンテロウイルスによる無菌性髄膜炎があげられます。それぞれの疾患におけるウイルス分離状況を昨年と比較してみました。

【ヘルパンギーナ】

昨年は2月から11月にかけて32検体が採取され、コクサッキーウイルスA2型11株、A5型5株、A6型1株、A8型2株が分離されました。今年は現在までのところコクサッキーウイルスA6型のみが5株分離されています。今年の検体数がまだ少ないため断言はできませんが、昨年が多数の血清型の混合流行であったのに対し、今年はA6型のみ流行となっているようです。

【手足口病】

昨年は19検体が採取され、コクサッキーウイルスA16型のみが16株分離されました。一昨年大流行したエンテロウイルス71型は1株も分離されませんでした。今年は1月、2月に1株ずつエンテロウイルス71型が分離され、再度このウイルスが流行するのかわかれましたが、本格的なシーズンに入ってから、分離されたのはコクサッキーウイルスA16が2株だけです。検体の搬入状況からみると、一昨年ほどには大きな流行とはなっていないように思われます。エンテロウイルス71型は中枢神経系の重症例や死亡例を出しているウイルスです。このため、特にこのウイルスについては動向を把握しておく必要があります。

【無菌性髄膜炎】

夏季にはエンテロウイルスによる無菌性髄膜炎が流行します。昨年はほとんど流行がありませんでしたが、一昨年はエンテロウイルス71型による無菌性髄膜炎が多発しました。今年は無菌性髄膜炎検体からエコーウイルス13型が分離されています。エコーウイルス13型はこれまで、埼玉県では分離されたことがなかったウイルスです。このため、抗体を保有している人が少ないと予想され、今後、流行が拡大する恐れがあります。